

平成 24 年度 海外臨床薬学研修報告書

「高い意識を持って臨む姿勢 -

サンフォード大学海外臨床薬学研修を通して得たこと」

研修期間：平成 24 年 6 月 10 日～6 月 24 日

研修先：サンフォード大学薬学部

薬学部薬学科 6 年

07097313

岡崎 真貴

昨年度、長期病院・薬局実習を終え、実際に現場に入ることによってイメージを明確化することができ、日本の薬剤師の現状を把握することができましたが、実習を通して思ったことは、薬剤師の職域はまだ開拓の余地があるということです。病院では病棟業務の本格的な取組をもたらし、薬局では在宅を広く展開し始めているが、治療に十分な積極的関与ができていないと言いつつも感じました。その中で、病院での実務実習で、指導薬剤師の方が折に触れ「薬剤師がただのコメディカルで終わるかどうかは、6年制教育を受けた君たち次第だ」と仰っていたのが強く心に残りました。私は先生の激励を受けて以来、6年制教育を参考とした米国をはじめとする医療先進国の教育制度や薬剤師業務に大きな興味を持つようになりました。それは、これから薬剤師になる私達がこれまで以上に主体的に医療に介入する手段を考える上で、日本だけでなく他国の臨床現場における薬剤師の姿を見ることでヒントが得られるのではないかと思ったからです。そこで、米国の薬学教育や薬剤師の関わり方を実際に見ることで新しい発見を見出し、私自身の目指す薬剤師像を明確にする契機にしたいという思いで、この海外臨床薬学研修に志望しました。

平成24年6月10日から24日まで、アメリカのアラバマ州にあるサンフォード大学及び提携医療機関において研修を受けました。2週間という短い期間ではありましたが、総合病院を初め、薬局、クリニックなど様々な施設を見学し、また、大学では米国の薬学教育や医療制度についても触れることができ、視野の広がるとも良い経験となりました。

私が研修した医療施設は、Homewood Pharmacy、St. Vincent's Hospital、Jefferson County Department of Health、Samford University Drug Information Center、Shelby Baptist medical center、Children's Hospital of Alabamaの6施設です。研修を通して、現場での薬剤師の役割・位置づけ、他の医療スタッフとの関係性を、また学生の実習の在り方やそれに対するファカルティ（各病院やクリニックで薬剤師として活動し、かつ薬学生の臨床指導を行っている大学の臨床教員）の関わりを見ることができました。ここでは、特に印象に残った研修先を挙げ、そこで得たこと、新しく発見したことを報告していきます。

Homewood Pharmacyは、街中にある処方薬と市販薬の両方を取り扱う薬局（Clinical Pharmacy）です。薬剤師としての関わりは、日本の薬局とそう変わりはないと感じましたが、“自分達薬剤師がもっと患者さんのためにできることはないか”という意識を常に持ち、それを実際に行動に移すことができていると強く感じました。その例として、日本は病院では、薬剤師が患者さんの所に直接出向いて、話をすることで問題点や評価、プランなどSOAP形式にしてスタッフ間で共有する姿は目にしますが、まだ薬局薬剤師にまでは浸透していない状況にあると思います。Homewood Pharmacyの薬剤師は自ら、SBAR(Situation、Background、Assessment、Recommend)という評価方法を立案し、ここで得られた情報を医師に提案することで患者さんを双方からしっかりケアできる体制を作り上げています。また、彼らは、MTM (Medication Therapy Management)という治療薬の臨床評価も行っています。これは、薬剤師と患者さんが互いに治療薬に関して話し合い(30分～1時間)、その情報を基にDoseチェック、中止すべきなのかを評価し医師にフィードバックするというものです。少なくとも、私が行かせて頂いていた実習先の薬局ではここまでの介入はできていなかったため、米国の薬局薬剤師が患者さんに対して主体的に薬物治療に介入する姿

を見たことから、日本でも薬局薬剤師がもっと専門性を発揮していけるよう努力する必要があると感じました。

Jefferson County Department of Healthは、二階建ての建物で一般内科や歯科、眼科、小児科があり1日平均患者数約40人のクリニックです。ここでは、糖尿病患者に対する薬剤師(レジデント)の関わりを見ることができました。患者さんに対して薬剤師のみで介入(経過観察)するという日本では見られない光景を目にし、薬剤師は医師に任される程の信頼性が構築されている事が伝わってきました。ここに来る患者さんの多くは貧しい方が多く保険に入る金銭的余裕がないため、このような患者さんを対象とした保険制度に「メディケイド」というのがあるが、この制度では使用できる薬剤が限られており、薬剤の選択の余地はほとんど無いと教えて頂きました。実際に、薬剤師と患者さんの対談を見学させてもらい、一連の流れを見ることができました。簡単なガイドブックを用いて、疾患、症状、検査値(HbA1c)、目標とする検査値、低血糖対策、食事・運動、足のチェック、血糖値測定方法の説明と日本と差ほど変わり無く、薬剤師はコンプライアンスの向上、食事や運動などの生活面からしっかり介入していました。しかし、当然の事ですが、米国は日本と比べて、食事内容が大きく異なります。私も研修中に米国の食事を堪能しましたが、脂質、糖質、塩分がとて多く、正直、肥満や糖尿病の患者さんが多いのは仕方ないと感じてしまいました。しかし、彼らにとってはごく普通の食事です。患者さんの話を聞いていても、この米国の食生活を改善するのはとても困難で、その中で薬剤師が患者さんに“この状態がどれだけ危険なのか”を把握させ、患者さんにも“治療しなければならない”という高い意識をもってもらうのは非常に難しいと感じました。そういった状況で、薬剤師が血糖値測定をできる事は、指導時に重要な支えになると思いました。実際に患者さんの血糖値をその場で測定し、その値を見てもらうことで危機意識を高めてもらい、自ら治療に専念しようという意識を少しでも持ってもらえるのではないかと考えられるからです。信頼性を高め、職能を広げた事で患者さんに深く介入でき、薬剤師として“患者さんをもっと良くしてあげたい”という気持ちを叶えることができる環境があると改めて感じました。

Shelby Baptist Medical Centerは約200床ほどの総合病院です。ここでは、薬学生のレベルの高さと医療人としての高い意識をもって実習に臨む姿を見ることができました。学生は午前7時30分には実習先に入り、ファカルティの指示なしに自分が見るべき患者さんの情報に目を通し、この患者さんのメインプロブレムは何か、薬剤師として介入すべきポイントはどこかを考えます。学生は、複数の患者さんを受け持っており、抗菌剤のTDM管理をメインプロブレムとし介入していました。学生は、ファカルティが来るまでに全ての患者さんのCrCl、Ke、 $t_{1/2}$ 、LD (Loading Dose)、MD (Maintenance Dose)を算出し、投与設計を行い、次回TDMの結果への対策まで考えることができます。私は「日本の実習では、大抵の学生は指導薬剤師の指示のもとで行動するので、あなたの自主的な行動を見て驚きました」と言うと、彼女も少し驚いたように「アメリカの実習ではごく普通のこと」と言っていました。米国では、実習先に入ったら“教員に頼らずに自分でやる”という意識が高いことから、必要な知識は全て頭の中に把握しており、聞かれた時には自信を持って答えることができます。私は、彼女と同じ年数薬学を学んでいるのにも関わらず、彼女が教えてくれた計算が理解できない恥ずかしさを感じる共に、自分の薬剤師になるという意識の低さに気づかさ

れました。

また、米国のバンコマイシンの使用状況を知ることができました。患部や状況にもよるが、患者さんがMRSAに感染していると信じて、第一選択薬としてバンコマイシンを使用することが多いと聞き、薬剤師の方に「米国の医師は耐性菌の出現を恐れないのですか」と質問したところ、「もちろん彼らは耐性菌のことも考慮しているが、それ以上にMRSAの感染拡大を恐れている」と教えて下さいました。米国と日本でのバンコマイシンに対する考え方の違いに驚きました。

上記に示してきた以外にも日本では見られない薬剤師の関わりはあるが、そもそもこの米国の薬剤師の行動力・信頼性はどこからきているのか。私はこの研修を通して、大学や医療機関での教育にあると確信することができました。米国ではPre-Pharmacyとして、他大学などで一般教養を習得し、厳しい選抜を経て薬学部に入ることができます。この時点で、薬剤師になりたいという強い気持ちを持った学生が選抜されるので、日本とでは学生の意識の違いが大きく出てくると思います。高い意識を常に備えているからこそ、自然と行動へと繋げることができると思うようになりました。また、サンフォード大学の薬学教育のカリキュラムでは初学年から臨床実習が義務づけられ、4年次では9ヶ月の間、1ヶ月毎に様々な医療機関で実務研修を行います。私は薬剤師の方に「どのように医療スタッフと良好な関係をつくっているのですか」と質問したところ、「学生時の実習が大きく影響している」と教えて下さった様に、学生の頃から医療スタッフとの信頼関係を構築することができます。医師の方が私たちに「彼ら薬剤師はいつも有益な情報を提供してくれる。いつも彼らに助けられている」と教えて下さいました。こういった彼らの行動力と信頼性があつたからこそ、現在のような地位を確立できたのでしょう。

今研修を通して、自分に足りないのは“高い意識を持って臨む姿勢”であることに気づきました。米国の薬学生の実習に臨む姿をみて、自分が実務実習にもっと高い意識を持って自主的に臨めば、さらに多くのことを学ぶことができたのではないかと考えさせられました。この経験から、患者さんに何ができるかを常に考えられる薬剤師となり、医療スタッフとの良好な信頼関係を築き、チームの中で薬剤師が主体的に薬物治療に参画することで職能を発揮していける環境をつくっていけるように努力したいと思いました。日本でも、米国のように学生時からもっと臨床で接していける環境ができ、薬剤師の活躍の場がより一層広がることを強く望みます。最後に、このような貴重な機会を与えて下さった方々及びサンフォード大学の先生方に深く感謝致します。